東京2020大会

東日本大震災から10年に寄せて　橋本聖子会長メッセージ

2021年3月11日

一方で、この頃から、何とか被災地の方の力になりたいと、自発的にアスリートが東北を訪れるようになりました。日本のスポーツ界も様々な復興支援活動に取り組むようになり、私自身も多くのアスリートとともに、元気を届けようと、被災地を訪れる機会が増えるようになりました。実際には、我々アスリートの方が、地元の方々から、たくさんの元気をもらうことも多かったです。今日まで続いているこの経験は、アスリートと日本のスポーツ界にとって、かけがえのない経験となりました。社会における自らの役割と、スポーツの力を再認識するきっかけとなったのです。

2011年夏のFIFA女子ワールドカップにおいては、被災地からいただいたエールでチームが結束し、日本のなでしこジャパンは優勝して、多くの皆さんに元気を届けてくれました。翌年のロンドンオリンピック・パラリンピックにおいても、奮起した日本選手の大活躍が多くの人々の希望となり、被災地においても、帰国した地元の選手たちをあたたかく迎えていただきました。

やがて、「スポーツの力」は、招致活動においても大きなテーマとなり、震災復興への貢献は、この東京2020大会の源流たる由縁となりました。この当時、少しずつですが、オリンピック・パラリンピックを日本で開催することに、賛同を得られるようになってきました。被災地をはじめ、多くの皆さまの心強い支援を得ることができ、大会の招致が決定いたしました。

招致決定後も、今日に至るまで、私たちは、今なお復興に大変なご苦労をされている方々に、少しでも元気や力を届けたいと、様々な活動に取り組んで来ました。

被災地でも競技をと、宮城・鹿島ではサッカー予選、福島では野球・ソフトボールを開催することになりました。昨年、ギリシャで採火されたオリンピック聖火は、宮城県松島基地に到着し、その後、復興の火として被災3県で巡回展示を行い、多くの方にご覧いただきました。今月25日に始まるオリンピック聖火リレーは、福島を出発し、また、少しでも長く被災地を聖火リレーできるよう、福島、岩手、宮城の3県については3日間ずつ走行することになっています。このオリンピック聖火リレーのコンセプト「希望の道を、つなごう。」は、震災復興に貢献したいという、組織委員会の思いが詰まったテーマとなりました。

新型コロナウイルス感染症の影響で、私たちは前例のない大会延期を経験していますが、このコロナ禍においては、再びスポーツが社会におけるその役割を問われているように思います。この10年間、スポーツ界が経験してきたことを忘れることなく、そして、復興への貢献の決意をあらたに、安全で安心な東京2020大会の開催を通じ、コロナによって分断された世の中において、人々の繋がりや絆に貢献し、社会における役割をしっかり果たしていきたいと思います。

©公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
All rights reserved.

写真提供：
アフロスポーツ　ゲッティー イメージズ　フォト・キシモト　竹見脩吾